

# タシユ・チベット族の

# 歴史の記憶と族群の認識

表 曉文

(訳 柏木豊美)



四川のチベット族は、総人口一四九万六五二四人(二〇一〇年)で、一三の下位グループからなる。アルス(爾蘇)・チベット族はこのうちの一つで、人口約三万人(二〇〇七年)、三つの方言区に分かれ、東部方言区は自称アルス、西部方言区は自称リル(里汝)、中部方言区は自称タシユ(多統)である。

タシユ・チベット族は、アルス・チベット族内の中部方言を用いる族群(エスニック・グループ)で、人口約二〇〇〇人、四川省涼山彝族自治州北部の冕寧県に居住する。彼らは二重の民族意識をもつ。民族認識としてはチベット族の一支で、タシユ・チベット族、族群認識としては自稱タシユである。居住区は、藏彝走廊区の漢族とチベット族、イ族の三大民族の文化が交差する安寧河上流域兩岸

で、長期にわたって周辺の他のチベット族や他民族と頻繁に交流し、互いに影響があった。特に、安寧河流域は成都平原に次ぐ四川第二の穀物地帯であったため漢族との交流が多く、周辺のどのチベット族より深く漢文化の影響を受けており、自文化が覆い隠されてしまったかのようなのである。

また、母語の衰退も顕著である。現在、タシユ語を完全に話せる者はすでに一人もおらず、日常語をわずかに話せる者も、多くが七〇、八〇代の老人である。二〇年後、タシユ語は消滅の危機に瀕するという状況から、失われた言語になってしまふことはまちがいない。一方で、タシユ・チベット族はカム・チベット語を日常交流の手段としており、歴史上多くの者が康地区徳格等のボン教(笨教)寺院で經典を学んでおり、冕寧県曹古壩にはチベット文字經典

を所蔵する清代の寺院が残っている。「四清」(一九六三)一九六六年、政治・経済・組織・思想の四つを清め社会主義教育の徹底をめざした運動)や「文化大革命」以前には、ほとんどの家庭に大量のチベット文字經典があった。

明末清初に代々行われていた火葬が徐々に土葬に変わった時、墓碑の碑文は最初チベット文字で刻まれたが、その後漢文とチベット文が併記され、ついには完全に漢文のみとなった。中華人民共和国建国前には、一般のタシユ・チベット族でチベット文字を理解できる者はおらず、文化の伝承は断絶された。タシユ文化の主要な伝承者は、宗教聖能者のパビ(扒比)、ムミ(木米)である。しかし近現代の民族抑圧や差別、民族間の対立、災害、伝染病の影響、さらには建国後の一時期の不適切な政策のために、パビとムミは激減し、彼らによって伝承されたタシユ文化の内容は益々少なくなり、次第に人々から遠ざかった。

## 一 タシユの呼称の由来と起源

### (一) タシユの呼称の由来

タシユの名称について、彼ら自身は「*nya bi duo xu na*」<sup>(1)</sup>といい、「我々はタシユ語を話す人である」「我々はタシユである」を意味する。学者も、冕寧の安寧河上流沿岸のチ

ベット族の自称をタシユとする。概して族称はその族群のグループ意識の凝集であり、他者との区分を示す重要な帰属標識である。タシユは族群の自称として早期にあったことがわかる。

漢語の「多統」は、清初に初出する。今西春秋収蔵『多統訳語』では、「西番」「番人」に相応する漢字表記はどれも「多統」である。西田龍雄も、初出の多統を安寧河上流のチベット族支系とした。西田は、一九七〇年に「多統訳語」(清初『西番館訳語』所収)を研究した時に、「西番」「番人」「番僧」「番漢」の「番」はチベット語の原語ではすべて *tog so*、*tog su*、*tog sug* と関連し、漢訳音がみな多統に近いことを発見し、それに基づいて『多統訳語の研究』を完成させ、この言語をタシユ語と名付けた。<sup>(4)</sup>以来、西南民族研究の方国瑜や何耀華、孫宏開、劉輝強、龍西江、黃約布らは、論文や專著で多統の呼称を用い、「多須」「多虚」とも記した。例えば、方国瑜は『彝族史稿』で、冕寧西番の自称はかなり複雑であるが、大部分は多虚であるとした。龍西江は、<sup>(5)</sup>多須は冕寧西番人の自称で、多須、多統とも記すとす。李星星も冕寧のタシユ・チベット族支系の自称はタシユであるとす。

注目すべきは、明代の史籍中にすでに多統と同音異字の族群呼称「脱蘇」が記されていることである。『四川土夷考・寧番衛圖説』によれば、「寧番衛、古蘇州地。故名其

蛮曰脱蘇、其人凶獷強悍、刀耕火種、遷徙無常、不以積威為事。……衛之東南、衛之東北、錯居夷寨。若五宿、若結古、若熱啣瓦、若撻羊、若納納碑、若馬蝗溝等番、雖叛服不常、亦多馴撓聽命」とある。脱蘇は、発音が『西番館訳語』の *tog so*、*tog su*、*tog sug* などに近いだけではなく、『四川土夷考』で脱蘇の活動区域とされる五宿、熱啣瓦、結古、撻羊、馬蝗溝、納納碑などは歴史上のタシユ・チベット族の居住区域であり、その地名は現在と基本的に一致する。よって、現在のタシユは、明代の脱蘇に起源がもとめられる。また、龍西江は唐宋の史籍によって、多統は唐の「東欽」や宋の「左須」と近音異字あるいは同音異字の関係であるとし、次のように記す。「北谷は現在の冕寧皇城一帯で、西番の一支である多須の代々の居住地である。東欽は多須と近音異字であり、唐代の二姓白蛮は羌語支系言語を操る多須西番の先民である」。『建炎以来朝野雜記』邊防記・邊防二・左須夷人出沒にも「黎州徼外夷人、旧不相通、乾道六年、雅州沙平夷人與岩州夷人相攻、沙平求援於左須夷人楊出耶、因而獲勝、出耶者、本黎州五部落夷人也」とある。「左須は多須である、左と多は同音が變化したもので、同一民族であるから」とする。東欽と左須は、発音の上では確かに多統に近いが、東欽と左須を多統とするにはさらに多くの資料が必要である。

以上によれば、次の三点が指摘できる。一に、多統は現

在の四川省涼山彝族自治州冕寧県安寧河上流沿岸に住むタシユ・チベット族の自称である。二に、多統には多須、多虚など同音異字がある。三に、漢文資料では、多統と関連する集団呼称の初出は、明の『四川土夷考』の「脱蘇」である。

## (二) タシユの起源

多くの研究者によれば、タシユ・チベット族は漢晋時代の旄牛夷の末裔で、唐宋時代に勿鄧や両林、豊琶などの東蛮語部に発展して各地に分布し、元明清代に西番の主要な一支系となった。

何耀華は、次のように指摘する。「旄牛夷は西漢時代に現在の冕寧、越西、甘洛、漢源の広範な地域に居住した。冕寧県の旄牛山一体には旄牛夷が集中して居住し、かつての旄牛道は、西昌を経てこの地の冕寧や漢源を過ぎ成都に達することから、その名が付いた。……川西南チベット族の八つの地の自称をもつ各部族は、大部分が旄牛夷の末裔である。例えば漢源、甘洛、越西の「爾蘇」、石棉の「魯蘇」、冕寧県壩地区と東北部の「多須」、九龍、木里諸県の「里汝」などである」。ここでは現在の冕寧、越西、甘洛、漢源から成都に至る旄牛古道で、その土着民が主に旄牛夷であることを示している。

唐宋時代に旄牛夷は、勿鄧、両林、豊琶など東蛮の各部

落に發展した。これらの分布状況は『新唐書』南蛮伝によれば次のようである。「勿鄧、豊琶、両林皆謂之東蛮、天寶中、皆受封爵」。「勿鄧地方千里、有邛部六姓、一姓白蛮也、五姓烏蛮也。又有初裏五姓、皆烏蛮也、居邛部、台登之間。……又有東欽蛮二姓、皆白蛮也、居北谷。……又有粟蛮二姓、雷蛮三姓、夢蛮三姓、散処黎、嵩、戍数州之鄙、皆隸勿鄧。勿鄧南七十里、有兩林部落、有十低三姓、阿屯三姓、虧望三姓隸焉。其南有豊琶部落、阿諾二姓隸焉」。

『宋史』蛮夷四には次のように記す。「黎州諸蛮、凡十二種：曰山後兩林蛮、在州南七日程；曰邛部川蛮、在州東南十二程；曰豊琶蛮、在州西南一百里；曰保塞蛮、在州西南三百里；曰三王蛮、亦曰部落蛮、在州西百里；曰西箐蛮、有弥羌部落、在州西三百里；曰淨浪蛮、在州南一百五十里；曰白蛮、在州東南一百里；曰烏蒙蛮、在州東南千里；曰阿宗蛮、在州西南二日程。凡豊琶、兩林、邛部皆謂之東蛮、其余小蛮各分隸焉。邛部於諸蛮中最驕悍狡譎、招集藩漢亡命、侵攘他種、閉其道以專利。……夷俗尚鬼、謂主祭者鬼主、故其酋長号都鬼主。……邛部川蛮、亦曰大路蛮、亦曰勿鄧、居漢越嶲郡会無臬地。其酋長自称「百蛮都鬼主」。

唐の「勿鄧」から宋の「驕悍狡譎（驕慢狡猾）な「邛部川蛮」までは、「都鬼主」とも称された。その勢力は強大で属民が多い。方国瑜は『雲南志』等に基づいて次のよう

に考証した。「勿鄧には二十の姓があり、邛部から台登より以北に居住した。これは現在の越西、喜徳、冕寧などの地である」。西番はかつて強大であり、宋代には漢族と封建的佃戸関係をもった。『宋会要輯稿』によれば、「黎州過大渡河外、弥望皆是蕃田、每漢人過河耕種其地、及秋成、十婦其一、謂之蕃租」とある。

元、明、清には、冕寧県内のチベット族は「西番」と呼ばれており、そこには自称「多統」の一支も含まれた。「西番」の語は、『宋史』蛮夷四に初出する。「淳化元年、諾駁自部馬二百五十匹至黎州求互市、詔増給其直。諾駁令訳者言更入西蕃求良馬川中市」。明の曹学佺『蜀中広記』巻三十四寧番衛によれば、「元時於邛都之野立府曰蘇州、借蘇示義以名之也。国初言土官怕兀它从伊嚙特穆爾為乱、於是廢為衛、降官為指揮、環而居者皆西番種、故曰寧番。……在建昌北九十里、東連越嶲界、北至西天烏思蔵、西隣三渡月落日……」とある。『明史』西域列伝二には、「西番、即西羌、族種最多、自陝西歷四川、雲南西徼外皆定」、『明史』四川土司一には、「寧番衛、元時立於邛都之野、曰蘇州。洪武年間、土官怕兀它從月魯帖木兒為乱、廢州置衛。環而居者、皆西番種、故曰寧番。有冕山、鎮西、札州中三千戸所」とある。これらの記載は、元明代から現代までの西昌、冕寧、漢源および甘孜蔵族自治州地域に西番が分布したことを示す。清の咸豊年間の『冕寧県志』巻十

「土職」には一四戸の西番土官とその基本状況が記されており、住民はみな西番で、「県属土職自雍正五年裁革外、現存土千戸一員、土百戸十三員、皆於康熙四十九年奉川陝總督殷為招撫土司番蠻案内投誠授職、領有印信、号紙。……以上土千百戸十四員俱系西番苗裔」とある。何耀華は、二元、明、清時代の西番の地理的分布は、かつての旄牛の地を主とし……冕寧北より漢源および甘孜藏族自治州、越西に至る地域には、みな西番が分布した」とする。

## 二 歴史上のタシユとその変遷

歴史上のタシユは、分布が広く、人口も多い。彼らは集居地——蘇州壩を「博羅巴」と呼ぶ（前に「尼瑪薩差」を加えることもある）。「太陽が照り輝く中心の地」政治の中心であることを意味する。

龍西江の考証によれば、「酥州呢唧堡（現在の額基村）土千戸は姜氏、後代土百戸の姜嗟（羅）氏、糯白瓦土百戸の李氏と大村土百戸の馬氏、この四つの姓は現在の大橋鎮区域内に居住する。自然村の名は今も変わっていない。管轄地は、咸豐年間『冕寧県志』の記述と実地調査によれば、現在の寧源郷、治勒郷と九龍泉灣壩郷の大部分を含む。熱即瓦土百戸の金氏と大塩井土百戸の葉氏の居住地は、曹古郷大馬烏村と彝海郷に分かれ、金氏は曹古郷を管

轄し、葉氏は現在の彝海郷と拖烏郷を管轄した。大塩井土百戸の葉氏は、康熙年間の番戸は二二〇戸だったが、建国前に番民が離散し、土司の跡継ぎも途絶えた。以上姜、羅、李、馬、金、葉の六姓の百戸の管轄地はまさに現在の冕寧北部の拖烏地区であり、西番の村落はすでにイ族の村落に変わっていた。中村土百戸の馬氏は西番寨五カ所を管轄し、架州土百戸の李氏は西番寨六カ所を管轄し、三大枝土百戸の印氏は西番寨四カ所を管轄した。その管轄区域は、咸豐年間『冕寧県志』の記述と実地調査によれば、中村土百戸の馬氏管轄地は現在の梘槽郷と城門すぐ外の河東および梘槽両村で、架州土百戸の李氏管轄地は現在の樟木と惠安郷の迫夫村、沙壩村の一部分の地区で、三大枝土百戸の印氏管轄地は現在の後山と東河両郷および富強郷の富強村であった。三姓の土百戸の管轄地は現在の冕寧県の城門のすぐ外の北部と巨龍地区の東部と南部である。住民は皆「多須」（すなわち多統）である。『四川省志』『邛崃野録』によれば、「三大枝土百戸印氏が康熙時投誠、所管番民有一百二十九戸。到解放前夕、番民散尽、土司已成平民。……清康熙四十九年（一七一〇）冕寧九員土司投誠後所轄の番戸為一六〇六戸；但到了道光年、据道光『寧遠府志』載九員百戸、只有五二三戸属民、減少了一〇八三戸；据冕寧県檔案館存中共冕寧県委秘書室資料一四号案卷保存的一九五三年一〇月「冕寧県選舉委員会人口統計表」載解

放初的西番人口統計數：九員土百戸和一員土目轄地僅剩番民七一人、若按每戸五人計、共約一四〇戸左右<sup>(15)</sup>とする。

#### 事例1 哈哈那布堡子の杜正元の話

冕寧県タシユの地理的分布は、解放前は、南側は復興鎮馬房溝、白土およびその後方まで、西側は回龍郷、哈哈郷、東側は齋曹古壩、北側は齋北山関すなわち惠安郷である。かつて、曹古壩一帯のタシユには呉 (wu xu)、金 (a<sup>95</sup>) などの一族があり、有名な印経院もあつて、冕寧、木里などの地区の大部分の經典はすべてこの印経院からである。その後、人々は移住して印経院も廢墟となつた。伍宿や和尚村の金家は曹古壩から移住してきたらしい。

#### 事例2 冕寧県志事務所の馬文中の話

清初、冕寧県の人口の三分の二がタシユであつた。大橋蘇州壩兩岸はみなチベット族で、姜千戸、馬百戸、羅百戸、李百戸がいた。治勒郷のタシユには、sa ba 家 (卜家) や sa nu 家 (金家)、la hu 家 (胡家) がおり、姜千戸家の管轄下にあつた。la hu 家は一九五九年大橋に移り、ダム建設の時また移つた。林里郷は元來 sa sa 百戸家 (印家) 管轄下で、一二のタシユの姓があつたが、現在は印家しか残っていない。

口碑によれば、現在の県城一帯にはかつて多くのタシユが住んでおり、至る所に同様の伝説があつた。「かつて某県の役人の李は、欲の皮が張つていた。産婦には鶏腿肉の

納入を要求し、牧童には野生の果実の納入を要求し、毎日住民に担がせてあちこちをぶらついた。人々は堪忍袋の緒が切れて、彼を担いで不羸橋に来た時 (現在の観音岩大橋の所) に彼を河に投げ込んだが、溺れ死ななかつた。その後、彼は住民を次々と殺し、県城のすべてのチベット族を他地へ追い払つた。現地人によれば、伍宿の伍家は、本来は県城南門の南側におり、和尚村の幹家は県城の北街營盤一帯にいたが、李に追われて郊外に移つた。冕寧のタシユは、一部分が他の原因で近隣の木里、九龍、甘洛、塩源、石棉などに移つた。後山郷連二瓦堡の宋達瓦は次のように話す。「冕寧から木里に移つたタシユには宋、葉、謝、李などの姓がいる。木里卡拉から冕寧までは卡拉↓俾波↓棉沙湾↓冕寧のルートで、四日半の道のりである」。

謝紹思や伍正美は次のように話す。「かつて冕寧のタシユは人口が多く、石棉以南はみなタシユで、冕寧県城ができてから多くの者が移住した。越西と九龍のタシユはみな冕寧から引越した者である。木里の馬、黄、韓などの姓は冕寧から移つた。かつて伍宿の伍家大覚巴家には一二の一族集団があつたが、現在は二つしか残っていない。漢族は後発集団であり、広東から来た者もいれば、広西から来た者もいる。現在漢族が「七月半」で地盤業主 (土地を最初に開拓した者) を祀るのは、地盤業主にはタシユの祖先たちが祀られており、それに倣わなければ、漢族の祖先が

当地では受けいれてもらえないからである。中華人民共和国以前、タシユの地主は多く、擦拉穆家、灣子の呉家、那布の李家、王家、後山の王家、高坡の印家はみなタシユであった。当地の諺では、漢人は富裕な者であっても一人の貧しい西番にすら及ばないといった」。

一九八一年八月一〇月、四川省民族事務委員会、涼山彝族自治州人民政府、四川省民族研究所および西南民族学院などの機関の人員で組織された民族識別工作組は、次々と涼山彝族自治州の西昌、冕寧、甘洛、越西、喜徳などの県や雅安市、石棉、漢源両県で「西番一の識別調査を行い、次のように指摘した。タシユは冕寧県の大橋、団結、新民、東河、復興、後山、城関、会安(すなわち惠安)、哈哈、森榮に分布する。筆者の調査によれば、現在のタシユの主要分布地は冕寧県惠安郷の擦拉、九堡、余家灣子、垭口、迫夫、臬城、城内と城外に連なる街、鎮および和尚村、伍宿、哈哈郷の木拉楽、青山咀、那布村、那加瓦、復興鎮の紅星村、高堡、新銀、白土村、林里郷の嘎撒、嘎馬山、両河口、結果羅、後山郷の大熱渣、小熱渣、連二瓦である。また一部は大橋鎮にも移住したが、後に大橋ダム建設のために西昌や他地に移った。さらに少数のタシユは漢族あるいはイ族が多い集落にも散居した。

タシユには、かつて汝都という大一族があり、すべての姓が汝都から分かれた。哈哈郷那布村の杜正元(八一歳)

によれば、「互いに婚姻関係を結ばないのは皆同じ」汝都一に属する一族だからである。彼が述べることのできるのは七つの汝都で、(1) *luo guo yi* (羅果依) 汝都。aga 家(阿嘎、漢族姓名)、ma da 家(麻達、漢族姓名)、luo guo 家(羅果、漢族姓羅)、hang guo 家(笨果、漢族姓黃)、han guo 家(韓果、漢族姓韓)、wang guo 家(旺果、漢族姓王)、gua a bi 家(瓜阿比、漢族姓蔣)を含み、luo guo yi (羅果依) は冕寧に最も早く住んだ。(2) *wu ni* (呉尼) 汝都、漢族姓伍。(3) *ga sa* (嘎沙) 汝都、漢族姓印。(4) *ji mae* (幾麼兒) 汝都、漢族姓馬。(5) *bu ji* (布幾) 汝都、漢族姓穆。(6) *kong guo* (空搓) 汝都、漢族姓何。これも最も早く冕寧に居住した。(7) *mae nia* (麼兒納) 汝都、漢族姓葉である」。さらに馬文中によれば、「黄家は *hang guo* (笨戈) 汝都に属し、*luo guo* (羅鍋) 汝都には属さない。かつての居住地は呉尼汝都家であるが、呉尼家は卡拉に引越した」。龍西江は、冕寧での調査時に次のことを知った。「冕寧県大橋区のタシユのシャーマン呉万才(六二歳)によれば、かつて冕寧のタシユには数十の汝都(部落)があったが、現在は大部分が絶滅して八つしか残っていない。このことは、今日はわずかな者しか知らず、タシユ自身も忘れてる。……(1)魯古汝都は最大かつ最古の集団で、全部で次の九つの姓がある。阿嘎(金)、錯姑(羅)、結烏(馬)、綽粑(馬)、甘烏(甘)、麦杜(倉)、熱爾(姚)、魏、

巴汝(魯)、結普。……(2)黃姑汝都是黃、王、韓三姓に分かれ、ほぼ冕寧県境の北部と中部地区に住んだ。……(3)足蘇汝都是、宋、謝の二姓に分かれ、(4)俄羅汝都是、歐(俄巴)、俄瓦、俄薩、腊阿の四部)に分かれ、蔣、高、卜(嘎拉呉)の四姓がある。……(5)麻達汝都是姜、李の二姓に分かれ、生涯蘇州壩額基に住む。土百戸から出た姜磋(羅)も麻達汝都に属する。……(6)迫雨汝都是迫、卜の二姓に分かれる。……(7)嘎沙汝都是全部で一二の姓があり、県城附近および各地に散居する。現在の状況は不明である。(8)呉尼汝都是、冕寧西番の中で最古の集団で、呉、伍、烏、葉、薛などの姓に分かれる<sup>17)</sup>。

呉万才は、汝都是次の一であるとした。(1)呉哩汝都助租摸(呉姓)、(2)黄鍋汝都嗎佳腊乃(黄、韓、王の三姓)、(3)迫以汝都迫牙腊哩摸(迫姓)、(4)足蘇汝都哩摸(宋姓)、(5)匾以汝都(匾哈治姓)、(6)腊阿腊白左白大姑(欧姓)、(7)課起汝都(卡摸垮)、(8)惱左汝都(惱左余拉)、(9)果咧汝都(果咧告薩)、(10)那以汝都(哦摸呢)、(11)嘎薩期女汝都である<sup>18)</sup>。

以上の呉万才や龍西江の資料を比較すれば、筆者が調べた汝都の数と姓氏はみなある程度減少し、しかも両者の間に一定の差異と分化がみられる。

タシユの居住範囲や人口、姓氏の変化については、時間の経過や歴史の変遷にともなうて居住範囲は絶えまなく縮小し、人口は次第に減少、一部の姓氏はなくなった。曹古

や彝海、拖烏等の地域などかつてのタシユの地には、現在すでにタシユの姿はほぼなくなつて、漢族やイ族にかわり、すでに廢村になつた村もある。

タシユはなぜこのようになつたのか。まず、明初に軍隊が駐屯して漢族が徐々に入りこみ、平地は漢族と西番が雑居した<sup>19)</sup>。明の洪武二十五年(一三九二)、越嵩(建昌衛)の月魯帖木耳脇西番が反乱をおこし、明王朝は五年をかけてようやく掃討した。西番は最も深刻な攻撃を受けて人口が減少する一方で、漢族が大量に流入した。民国の『越嵩庁全志』には「西番、即唐吐蕃之遺、性馴、業耕種、前西山一帶横多。明劉綎殺戮、其勢始衰」とある。この西番にはおそらくタシユの先民が含まれていた。次に、清の康熙、雍正年間に二度にわたつて三渡水チベット族に対して戦いが行われ、漢族がさらに大量に移つてきた。先住の西番は再び打撃を受け、人口は激減した。さらに、清の同治二年(一八六三)から民国初期の半世紀の間に、安寧河兩岸のタシユの發生の地と牦牛山東西の平地が西へ移つてきた黒イの支系に占拠されたために、西番の集居地が無くなり、次第に人口が減つて、中華人民共和国成立当初には二千人余りのみとなつた。タシユは近代に入つて百年足らずの間に人口が九三%も減少した<sup>20)</sup>。漢族やイ族の移住や漢族への同化、戦乱による破壊は、タシユの分布範囲を縮小させ、人口減少の一大要因となつた。現地には次の

ような諺がある。「漢族は心臓をほじくりだし、イ族は骨を削りとる」。これは当時の民族関係の歴史的真相を映し出している。このほか伝染病も人口減少の重大な原因である。和尚村の韓国才によれば、韓家が喬家村落（大埡口村八組、現在のイ族村落）にいた時には七〇家余りの一族が暮らしており、村落の路地奥の老人は入口付近に住む子供のことを知らないほど大きかった。しかし和尚村に移住後、流行り病に遭って多くの人が死んだ。

### 三 タシユの族群認識に関する分析

族群成員の所属認識に影響を及ぼす要因に関する人類学的分析によれば、タシユの族群認識の変量要因は、主に婚姻や成育環境、民族間交流、おかれた場面の景観、年齢および性別、教育水準程度などにある。

#### (一) タシユの帰属意識の分層

タシユは、自身が所属する族群意識と、周辺の他民族との区別や序列からなる民族意識の二つの帰属認識をもっており、それがタシユの族群認識の核心である。タシユの成員は、さまざまな生存環境や民族間の往来、おかれた場面の景観や地域環境、家庭や婚姻、教育、職業、収入、年齢、性別などに基づいて、自己を中心に、重層する自己認

識において自己の帰属意識を選択する。これらの重層する意識における選択は、族群内の異なる支系や異なる民族感情の親疎や帰属をある程度反映している。同じタシユでも、教育水準や婚姻状況、生育環境、民族間交流、性別年齢およびおかれた場面などの違いは、タシユの族群認識のあり様の違いをうみだす。

次頁の表は、冕寧において異なる民族や族群が、近隣の民族や族群にどのような認識をもつのかを調査したものである。調査項目は、調査地である県城のレストラン、茶楼、家庭およびタシユが集居する村落において、質問対象者が全く準備をしていない状況で行われた。調査表から以下のことがわかる。

28のリルは、チベット族—リル—ナムイ・アルス—タシユ—漢族—イ族の順で自己に近いとする。農村出身であるが高等教育を受け、小学校教師である。自己認識はまずチベット族、リルの順で、次に地域的に最も近いナムイ、婚姻関係で最も近いタシユがつづく。生活環境や生育環境が自他の認識に影響を及ぼしている。

29のリルは、漢族—チベット族—タシユ—リル—イ族—アルス—ナムイである。県城で生まれ、高等教育を受けた。父はリル、母はタシユ、母の父は漢族である。若い世代は大民族である漢、チベット、イのみを民族として意識し、チベット族の族群についてはあまり知らないことがわ

四川省涼山彝族自治州冕寧県タシュ・チベット族の族群認識序列表

	民族	性別	年齢	最終 学歴	職 業	認識序列						
						近←						→遠
1	藏族(多統)	男	40	大專	金融 (經營者)	漢族	藏族	多統	里汝	納木依	爾蘇	イ族
2	藏族(多統)	女	70	中專	高級教師	多統	納木依	爾蘇	里汝	藏族	漢族	イ族
3	藏族(多統)	男	42	本科	公安局長	藏族	多統	里汝	納木依	漢族	爾蘇	イ族
4	藏族(多統)	男	39	本科	中学教員	多統	里汝	藏族	爾蘇	納木依	漢族	イ族
5	藏族(多統)	女	34	大專	信用組合	多統	藏族	漢族	イ族	納木依	里汝	爾蘇
6	藏族(多統)	男	68	中師	教師、州 人民代表	多統	藏族	里汝	漢族	納木依	イ族	爾蘇
7	藏族(多統)	男	64	小学	農民	藏族	多統	爾蘇	漢族	イ族	納木依	里汝
8	藏族(多統)	男	37	小学	農民	多統	藏族	納木依	爾蘇	里汝	漢族	イ族
9	藏族(多統)	女	39	小学	農民	多統	藏族	納木依	里汝	爾蘇	イ族	漢族
10	藏族(多統)	女	15	初中	学生	多統	藏族	イ族	納木依	漢族		
11	藏族(多統)	女	77	文盲	農民	藏族	多統	爾蘇	納木依	里汝	漢族	イ族
12	藏族(多統)	女	27	初中	農民	多統	藏族	里汝	爾蘇	納木依	漢族	イ族
13	藏族(多統)	男	37	大專	教員 (副校長)	多統	藏族	爾蘇	里汝	納木依	漢族	イ族
14	藏族(多統)	男	64	中專	農民	多統	里汝	藏族	イ族	納木依	漢族	爾蘇
15	藏族(多統)	女	75	文盲	農民	多統	藏族	納木依	里汝	爾蘇	漢族	イ族
16	藏族(多統)	女	24	小学	農民	多統	藏族	漢族	イ族	爾蘇	里汝	納木依
17	藏族(多統)	女	32	文盲	農民	多統	藏族	納木依	里汝	爾蘇	漢族	イ族
18	藏族(多統)	女	33	本科	中国農業 銀行	多統	藏族	爾蘇	納木依	里汝	漢族	イ族
19	藏族(多統)	男	39	本科	林業局	多統	藏族	爾蘇	納木依	里汝	イ族	漢族
20	藏族(多統)	男	67	初中	農民	藏族	多統	納木依	漢族	爾蘇	里汝	イ族
21	藏族(多統)	女	41	高中	都市住民	多統	里汝	納木依	イ族	藏族	爾蘇	漢族
22	藏族(多統)	女	39	初中	農民	藏族	イ族	多統	里汝	爾蘇	納木依	漢族
23	藏族(多統)	男	34	初中	農民	藏族	イ族	多統	納木依	里汝	漢族	爾蘇
24	藏族(多統)	男	44	高中	農民	多統	里汝	藏族	納木依	漢族	爾蘇	イ族
25	藏族(多統)	女	48	大專	教師	漢族	多統	藏族	爾蘇	里汝	納木依	イ族

	民族	性別	年齢	最終 学歴	職 業	認識序列						
						近←					→遠	
26	藏族(多統)	男	38	初中	農民	多統	藏族	里汝	納木依	爾蘇	漢族 イ族	
27	藏族(多統)	女	54	非識字	農民	藏族	多統	里汝 納木依	爾蘇	漢族	イ族	
28	藏族(里汝)	男	49	大專	小学教員	藏族	里汝	納木依 爾蘇	多統	漢族	イ族	
29	藏族(里汝)	女	25	大專	公務員	漢族	藏族	多統	里汝	イ族	爾蘇	納木依
30	藏族(納木依)	男	37	大專	中国農業 銀行 警備員	藏族	納木依	爾蘇	多統	里汝	漢族	イ族
31	藏族(納木依)	男	42	高中	浄水場 副所長	藏族	納木依	里汝	多統	爾蘇	漢族	イ族
32	藏族(納木依)	男	49	大專	県障害者 連合会 理事長	藏族	納木依	多統	爾蘇	里汝	漢族	イ族
33	漢族	男	45	大專	公務員	漢族	藏族	イ族				
34	漢族	男	45	大專	公安	漢族	藏族	イ族				
35	漢族	男	44	中專	医師	漢族	藏族	イ族				
36	漢族	男	44	本科	司法官	漢族	藏族 イ族					
37	漢族	男	44	本科	国税局 副局長	漢族	イ族	藏族	納木依			
38	漢族	女	32	大專	滄沽テレ ビジ職員	漢族	藏族	イ族				
39	漢族	女	37	小学	村長	漢族	多統	納木依	里汝	藏族	爾蘇	イ族
40	漢族	男	36	本科	公務員	漢族	藏族	多統	納木依	里汝	爾蘇	イ族
41	イ族	男	47	高中	信用組合 主任	イ族	藏族	多統	漢族			

凡例 藏族：チベット族  
多統：タシュ・チベット族  
里汝：リル・チベット族  
納木依：ナムイ・チベット族  
爾蘇：アルス・チベット族

本科：本科大学（四年制大学）  
大專：専科大学（三年制大学）  
中專：中等専科学校（専門学校）  
高中：高級中学（高等学校）  
中師：中等師範学校  
初中：初級中学（中学校）

かる。

30・31・32の三人のナムイは、チベット族―ナムイの順である。33〜40の八人の漢族は、当然ながら漢族が第一位で、以下は友人が何族であるかによる。チベット族の族群についてはあまり知らない。41のイ族も第一位はイ族で、妻がタシユなので次がチベット族であるが、チベット族の族群のことはあまり知らない。

婚姻と民族間交流の視点からいえば、中華人民共和国成立以前、タシユの婚姻は基本的に族内婚であり、内部の異なる「汝都」と結婚するか、リルやナムイと通婚する。建国後、タシユは漢族やイ族とも通婚したが少数である。さらに改革開放後は、自民族以外との通婚も増加し、漢族やイ族、居住地や生活環境と密接な関係がある他民族や他族群とも通婚することで、彼らへの認識度もかなり高くなっている。

総じて以下の点が指摘できる。

第一は、表の1〜27のタシユは一人の例外もなくみなタシユ、あるいはチベット族を序列の1、2におく。これはタシユのチベット族、あるいはタシユとしての自己認識が族群の最も核心であることを明示しており、さまざまな層での認識序列は族群認識の多重性を示している。

第二は、チベット族の支系であるリル、ナムイ、アルスの族群認識は、言語上の違いにすぎず、我と我、我とあな

たの違いにすぎない。しかし、漢族に対するイ族の認識は境界を明確にする民族認識であり、我と他の差異である。

第三は、タシユは、タシユあるいはチベット族を中心とする自己認識を堅持したうえで、他のリルやナムイ、アルス、漢族、イ族に対する認識の序列について、人の感情や生活経験、民族間の往来、通婚、場面、教育程度などの要因の影響をうけ、チベット族内の族群に対する自己認識と、周辺の他民族に対する民族意識を同時にもつという、多重的かつ複雑な認識をもつ。

第四は、ナムイやリルの自己認識は、タシユと同様に自己に対する認識とチベット族としての認識をもち、その上で族内支系に対する認識が優先される。族群内の彼らとタシユは我と私の関係であるが、民族の境界を明確にする漢族やイ族とは我と他の関係である。

第五は、自己認識において絶対多数を占めるタシユやリル、ナムイおよび漢族までもがイ族を序列の最後におくことについては、イ族の安寧河の西番区域への侵入という歴史的回憶や中華人民共和国成立前の民族間の境界と密接な関係がある。しかし若い世代がイ族に対して認識を高くしていることは、涼山彝族自治州で暮らしていることや日常生活において同年代のタシユとイ族の接触が多くあり、現在ではイ族や漢族、チベット族の民族間関係が良好であることと大いに関わる。

## (二) タシユに関する学者の見解

筆者の研究によれば、現在、学术界ではタシユと川西南チベット族の起源や各支系との関係について、以下の四つの代表的な見方がある。

一に、言語学者の孫宏開は、川西南のアルスには三つの方言区があるとする。甘洛、越西、漢源、石棉などの東部方言区はアルス方言で、自称はアルス、約一万三〇〇〇人、冕寧の中部方言区はタシユ方言で、自称はタシユ、約三〇〇〇人、木里藏族自治州や冕寧県と甘孜藏族自治州九龍県の西部方言区はリス方言区で、自称はリスあるいはリル、約四〇〇〇人である。すなわち孫宏開は、タシユはアルス・チベット族の支系の一つであると見做す。

二に、何耀華は『川西南藏族史初探』のタシユの移動伝説に基づき、かつ『後漢書』西羌伝の羌人の「附落南下」の記載と合わせて、「爾蘇」「魯蘇」「里汝」などは旄牛夷を起源とし、川西南チベット族は西蔵のチベット族と起源を同じくするとする。すなわち何耀華は、タシユはアルスヤリルと歴史上共通の族源——古羌人であると見做す。

三に、龍西江は、涼山彝族自治州の西番調査によって指摘する。「タシユはアルス系統から分かれて発生した。一に言語が相互間で通じない。二に移動経路が異なる。タシユは冕寧の西から移ってきたが、アルスは北方および東

北から移ってきた。三に精神的要素が異なる。タシユはずっと自分たちはアルスではないとしており、西番ではあるものの同民族ではない。両者は共通の起源をもつかもしれないが、歴史上分かれて久しく、双方はすでに同じ民族とは考えていない」とし、孫宏開の意見には賛成ではない。

四に、李星星は、まず孫宏開や龍西江らの研究を受け入れたうえで、タシユの先民は現在木里の水洛河流域に住むシユミ支系の先民で、密接な族源関係の可能性があり、さらに、シユミの先民は宋代に現在の峨边から甘洛大渡河沿いに居住した虚根蛮とみる。ただし、李星星はその後二〇〇七年一二月に再び冕寧で一〇日間のフィールドワークを行って以前の意見を覆した。すなわちタシユ支系は族源においてその構成要素はかなり複雑であり、アルス系だけではなく、ナムイやシユミ、古代の党古羌の構成要素を含むと考へた。ここで注意すべきは以下の二点である。一は、文化現象からみたタシユの族源の多元的特徴である。二は、冕寧のいくつかの地名に依拠するタシユの中に、党古羌の末裔である木雅支系の構成要素がみられる点である。

以上四つの観点と、タシユの古伝説や関連する考古学的、文献学的、民俗学的資料をあわせると、タシユの起源には主に以下の四つの構成要素が指摘される。

第一は、古代の安寧河流域兩岸に並ぶ大石墓の原住民の要素である。これまでの考古学的発掘資料によれば、安寧

河流域には春秋時代後期から漢代まで、大石を墓とする集団がいた。大石墓集団の属する民族については、学界には邛人説、笮人説、濮人説などがあるが、漢代以降の行方は文献で考察することができない。しかし、大石墓文化は少なくとも主に二点において、タシユの葬送習俗と共通点をもつ。一は、タシユにはかつて、石を積みあげて墳墓を造る習俗があった。二は、「搓巴作」は石を先祖に見立て、長幼の序列を高低によって順位付けした。すなわち一族の死者を石を並べて置くことで表象した。これは大石墓の先民が一族を集めて葬送する儀礼習俗に似ている。その上、現在の冕寧の一部のタシユは移住伝説の記憶をもつものの、一部の老人はタシユの開闢の地は安寧河流域であるともいう。

第二は、北から来た古蜀人の要素である。現在のタシユには古蜀文化の要素がかなりみられる。例えばホトトギス崇拜や石崇拜、独特な「包帕子」の習俗、族称の「統」は「蜀」と音が似ていることである。先秦時代の西南夷、唐代の東蛮、元明清時代の西番、番などすべてに、タシユの古代の民の構成要素がみられる。注目すべきは、一部のタシユは祖先の起源を「邛州南橋十八洞」伝説とすることである。これは祖先が現在の邛崃や榮経などの地から来たとするものであり、邛崃は古代においてまさに古蜀の重要な地の一つであった。

第三は、西から来た人々の要素である。これについては、学界ですでにかなり述べられている。簡潔に言えば、タシユにおける西から来た人々の要素は、主に吐蕃の末裔である「弥葉」が内包するものである。

第四は、一千百年におよぶ民族間、族群間相互の影響を経て、タシユにはリルやアルス、ナムイ、シユミなどの集団の要素だけではなく、かなりの漢人集団の要素も溶け込んでいる。

以上の四点を総合すれば、タシユ集団は安寧河流域の先住民集団を中心として、歴史的に絶え間なく周辺の他集団の要素を導入して形成されたと考えられる。筆者は、現在のタシユがさほどアルスとしての自己認識をもたないことから、孫宏開の意見には賛同しない。龍西江はタシユの移動伝説に注目して、孫の見解を否定したが、タシユの起源の多元的特徴を無視した。李星星は、自己の観点を修正して、タシユの族源の複雑性を認識し、さらにタシユの中にタングート末裔である木雅人の要素があることを明確にした。これはタシユの起源に関する最も全面的な観点であるといえる。

## 注

（一）アルス・チベット族の分布は石棉県約七〇〇〇人、甘

- 洛県約五〇〇〇人、越西県約三〇〇〇人、漢源県約一五〇〇人、冕寧県約四〇〇〇人、木里県約一五〇〇人、九龍県約六〇〇〇人で、雲南やその他の地にもわずかにいる。
- 〈2〉二〇〇七年一月一日、冕寧県地方志編纂委員会事務局にて馬文中より聞き取り。
- 〈3〉謝玉平によれば、「改革開放前、林里鄉白土村の奥に二つの墳墓があった。墓碑の碑文は誰も解らなかつたが漢文だと思った。その後、テレビのチベットの番組でチベット文字を見て、ふいに村の墓碑の碑文がチベット文字に違いないと思った」という。
- 〈4〉西田龍雄『多統訳語の研究』松香堂、一九七三年。
- 〈5〉龍西江「涼山境内的「西番」及淵源探討(上)『西藏研究』一九九一年第一期。
- 〈6〉何耀華『中国西南歴史民族学論集』雲南人民出版社、一九八八年、八九頁。
- 〈7〉方国瑜『彝族史稿』四川民族出版社、一九八二年、三九七頁。
- 〈8〉『宋会要輯稿』第一百九十八冊「蕃夷五」中華書局標点本、一九九七年。
- 〈9〉何耀華、前掲書、九三頁。
- 〈10〉「清」『冕寧県志』咸豊七年(一八五七)刻本。
- 〈11〉何耀華、前掲書、九三頁。
- 〈12〉四川省冕寧県地方志編纂委員会編『冕寧県志』四川人民出版社、一九九四年、一七〇頁。馬文中「冕寧藏伝仏教寺院覓蹤」『涼山蔵学研究』二〇〇四年第一期総第五期。

- 〈13〉龍西江、前掲論文。前掲『冕寧県志』一七一頁。
- 〈14〉前掲『冕寧県志』一七一頁参照。
- 〈15〉韓正聡「祖居冕寧県城藏族之韓戈家族遷徙及其文化遺跡」『涼山藏族研究』二〇〇七年総第八期参照。
- 〈16〉四川省民族委員会「西番」識別工作组「四川省「西番」民族識別報告」一九八一年二月。
- 〈17〉龍西江、前掲論文参照。
- 〈18〉吳万才手稿『涼山州藏族簡史——冕寧県藏族多統之譜』冕寧県地方志編纂委員会事務局馬文中提供。
- 〈19〉前掲『冕寧県志』一七〇頁。
- 〈20〉同右書、一七〇頁。
- 〈21〉孫宏開「爾蘇(多統)話簡介」『語言研究』一九八二年第二期。
- 〈22〉孫宏開「六江流域的民族語言及其系属分類」『民族学报』一九八三年。劉輝強「爾蘇語概要」四川省民族研究所編『民族研究論文選』第一編、一九八三年一〇月。
- 〈23〉李星星「蟹螺藏族——民族学田野調査及研究」民族出版社、二〇〇七年。
- 〈24〉李星星「大渡河南族群調査的研究與思考」『李星星論藏彝走廊』民族出版社、二〇〇八年、二九七―三〇一頁。

※本論は「多統藏族——藏彝走廊中的歴史記憶與族群認同」として『藏彝走廊——文化多様性、族際互動與發展』上、民族出版社、二〇一〇年に掲載されたものである。